

次の文章は、障害者や高齢者の旅をサポートする会社を作った人が書いたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

大阪在住の亀山英昭さん。彼は中途失明といって、いまから一〇年以上前に病気で視力を失っている。全盲で、強い光を感じる程度というが、白い杖を片手に、彼は一年中旅を楽しんでいる。

私自身がよく受ける質問——「目が見えないのに、旅行に行って楽しいものなんですか？」を、ぶしつけながら彼に問いかけてみる。彼は「目が見えないと、余計なものが見えなくていいですよ」と笑いながら、自身の体験談を話してくれた。

チャレンジ精神旺盛な亀山さんは、視力を失ってからアメリカに渡り、ひとり旅に挑戦した。そのこと自体も驚きだが、サンフランシスコの街では海辺にあるレストランにひとりで入ったという。

日本で白い杖を持った人間がレストランに入ろうとすると、店員の反応はほぼ一〇〇パーセント「お連れ様はどこに？」だそうである。全盲の人間がひとりでレストランに来るなんて、彼らの想像外の出来事なのである。しかし、そのアメリカのレストランの若い女性店員は「ハロー、」と明るく言ってから、

「当店には海辺に沿ってアウトサイドのテラスにあるテーブル席と、室内のエアコンの効いたテーブル席が用意できますが、どちらがいいですか？」

と聞いたという。彼は、

「そうですね。きょうは天気がいいから外で食べようかな」

と答え、屋外の海辺のテラス席へ案内された。

すると女性店員は次に、

「どちらを向いて座りますか？ こちらの向きだとまもなくサンセットですから、あなたの顔に素敵な夕日が直接あたります。それとも反対側の、海が目の前に広がる席がいいですか？ こちらも素敵な海からの風を感じるができます」と言ったという。全盲の彼に、である。彼は、

「では、サンセットが顔に直接あたる方向に座らせてください」と応じた。

白い杖を持ったひとりの日本人男性に、これだけスマートな対応ができるアメリカがぼくは好きだ、と亀山さんは語っていたが、まったく同感である。

ほんの小さなエピソードに過ぎないが、こんな出会いは想像するだけでも楽しくなるではないか。この女性店員は、全盲の客に動揺するどころか、彼が視力でなく肌で、目の前の海や夕日を感じるができるように、さりげなく配慮しているのである。

これが「目が見えなくても、旅行が楽しいか」の答えになっているだろうか。このレストランが美味であったかを私は聞き忘れたが、このときの思い出を楽しそうに語る彼の笑顔が強く印象に残っている。もちろん、女性店員が女優のように美人であったのかどうか、それは彼の想像力がすべてであるが、キュートな彼女の表情がありありと目に浮かんでくるようだ。

そもそも「バリアフリーの旅」と聞いて、皆さんはどんな旅を連想するだろうか。バリアフリーについての知識や関心のある人ならば、「リフト付きバスを使う車イスの人の旅」といったような、障害を持つ人のために特別に配慮し、手配された旅行をイメージするであろう。しかし、亀山さんの体験を聞くと、どうも「バリア」というのは、段差や建物の構造だけの問題ではなさそうだということが、おわかりいただけたのではないかと思う。

(高萩徳宗「バリアフリーの旅を創る」実業之日本社より)

問一 この文章の内容を一〇〇字程度で要約しなさい。

問二 傍線部について、具体的な例をあげて、あなたの考えを四〇〇字程度で述べなさい。